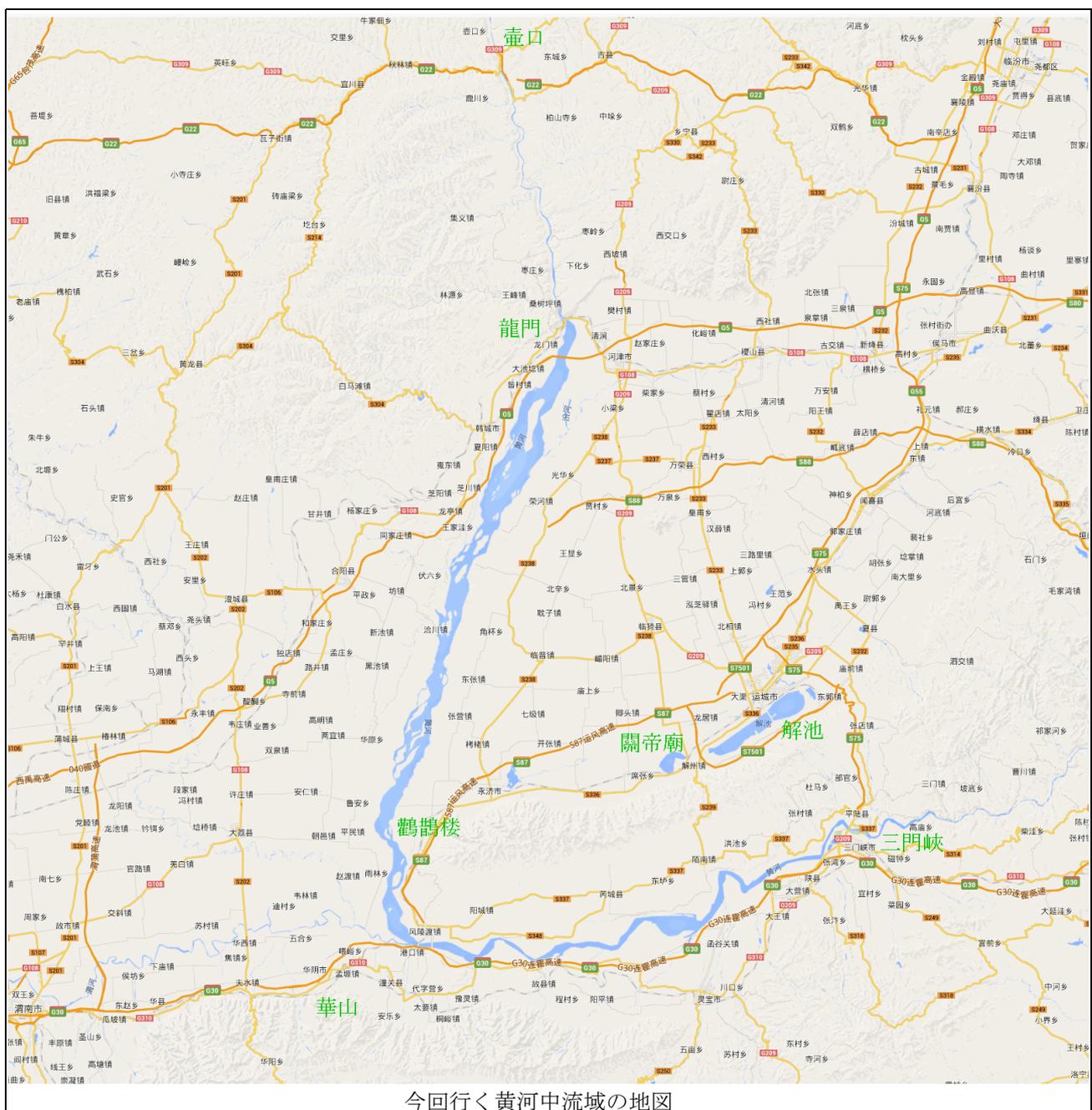


2014年度日中学院校友会中国旅行「黄河中流域の自然を訪ねる旅」

2014年12月24日

2014年度の校友会の中国旅行は、2,000m級の華[Huà]山にロープウェーで登る関係で、暖かくなる2015年度にずれ込んで4月中旬に催行する。旅行に行く場所は、下の地図のように南行していた黄河がL字型に東向きを変える部分の陝西省、山西省および河南省の境界地帯(通常は陝晋豫交界区と呼ばれているが、以下“この地域”と称する)である。

この地域は日本人に馴染みが薄く、日本から比較的近い割には、個人旅行で回らないかぎり、通常の日本からのパッキングツアーではほとんど行けない場所である。ここは、西の西安、東の洛陽、北の大同・平遥など世界遺産が豊富な著名観光地のまん中に取り残された、観光秘境といえる。



今回行く黄河中流域の地図

一 地 誌

☆ 黄河の流れ

陝西・山西・河南三省の境界を主に分けているのは黄河である。青海省西部のチベット高原に端を発し、上流の砂漠や草原地帯を流れてきた黄河は、この中流域では黄土台地(オルドス高原とそれに続く延安がある黄土高原)を迂回し、黄土台地と南北に走る呂梁山・火焰山および東西に走る中条山と秦嶺山脈の崤[Xiáo]山に挟まれて、滝や溪谷を刻んで最後は東に抜けている。洛陽盆地の先からは華北平原に扇状地が拡がり、下流域となっている。

中流域では、今回訪れる龍門(禹門)口のすぐ下流側で、山西省内を巡って来た黄河第二の支流汾[Fén]河と合流し、L字型に曲がる所で、西安方面から東進してきた黄河第一の支流渭[Wèi]河と合流する。

☆ 位置と気候

この地域は、北緯は洛陽や開封とほぼ同じ 34.5 度から、安陽とほぼ同じ 36 度までの範囲にある。これは南は大阪、北は東京に相当し、大陸性温帯気候に属する。

東経は 110~111 度なので、北京(東経 116 度)よりも太陽の動きが 20 分程度遅れる。なお、北京の日の出や日没も、中国標準時(青島や蘇州辺り)から 15 分程度遅れている。

年間降水量は 500mm 程度(東京の約 1/3)、年間平均気温は約 13℃と東京よりも寒いので、作物は長野や東北並である。4 月の平均最低気温は 9℃、最高気温は 22℃で、雨は 4 月から 11 月に多い。

この地域の大きな都市は、山西省の臨汾市(400 万人)と運城市(500 万人)である。河南省側には三門峽市(30 万人)、陝西省側は渭南市(90 万人)が隣接している。

☆ 交 通

空路は、運城市に国内線専用の運城関公空港(2005 年開港)がある。

黄河の南岸沿いの河南省側には、中国を東西に貫く大動脈連霍高速(G30)と鄭西高鉄が通っていて、高速鉄道で北京や鄭州、洛陽、西安との間は直行できる。河南省と山西省は黄河にかかる二つの橋でつながっているが、この地域の山西省側にはまだ在来の鉄道しかない。

陝西省と山西省の間も、高速道路と国道および在来の鉄道が黄河を超えてつながっている。北京から石家庄・太原・臨汾・龍門口・西安と抜け、四川省経由して雲南省の昆明を結ぶ京昆高速(G5)が山の間隙を東西に抜けている。これより北方の壺口では、青蘭高速(G22)(青島・済南・邯鄲・臨汾・壺口・蘭州)が黄河を渡っている。龍門口の南にも恒孫高速(S88)の橋が計画されていて、G5につながる予定である。

南北方向の道路は、モンゴル国境の内蒙古自治区の二連浩特から大同・太原・洛陽を経て広州に至る二広高速(G55)が走っているが、この地域は通っておらず、臨汾の南の侯馬で G5 と別れた侯平高速(S75)が、運城を経て中条山を九十九折りで抜け、黄河北岸の平陸とを結んでいる。その先黄河は 209 号国道で渡り、三門峽につながっている。

運城から西に向かった運風高速(S87)は、黄河の曲がり角にある風陵渡へ行き、その先の風陵渡黄河大橋を渡って G30 と結んでいる。在来の鉄道もここと龍門口で黄河を渡っている。

☆ 産物と産業

この地域は最近、黄河金三角区(運城市、臨汾市、三門峡市、渭南市からなる)と称されていて、省の境界を超えた 90 分圏の経済の一体運営が試みられている。

この地域では、新石器時代後期の仰韶文化の時代から穀物酒が作られていたと見られ、この地域の北方の平遥近くの杏花村は、高粱で作られたアルコール度が高い蒸留酒(汾酒および竹葉青酒、玫瑰汾酒)の産地として有名である。

穀物や棉花以外の農産物としては、林檎の生産が盛んで、収穫量は 400 万 t で全国の 15% を占め、その濃縮果汁の生産量は全国の半分に達している。

資源方面では、石炭生産が 1 億 t (全国の 4%)、コークスが 4,100 万 t (同 14%)、発電設備が 1,400 万 kW (同 3%) である。さらに、アルミニウム、金属マグネシウム、モリブデンなどの非鉄金属材料や黄金の生産高も全国的に見て重要な地歩を占めている。



解[Xiè]池では工業塩の生産も続けられているが、最近は観光も大きな収入源となりつつあり、各地に休暇村や行楽地認定された施設がある。今回訪れるところも概ねそのような「景地」であるが、場所によっては整備が不十分だったり、途中の道路がまだ建設中だったりする。

工業は洛陽などと同じく運城も重機械工業が中心である。運城市だけで見ると、マグネシウムとその製品、電機製品、紡績、鉄道車輛部品などの工場があり、外国との年間貿易額は工業以外も入れて、輸出入合計で約 15 億米ドルである。

二 歴史

☆ 古代から漢代まで

この地域の山西省側は、夏の禹[Yǔ]王が黄河の治水をし即位した場所とされていて、青銅器文化出現前の新石器時代後期(黄河中流域では前7,000～前2,000年)とされる彩陶土器で有名な仰韶(Yǎngsháo)文化(前5,000～前3,000年)の中心地のひとつである。

史記などの歴史書に記載された周より前の王朝に関しては、殷墟の発見によりすでに商(殷)の実在が証明されている。文字が書かれた遺物や遺跡が残っていないため、商の前の夏王朝の存在自体や、あったとしても成立の時期はまだ完全には確定していない。

暴れ黄河の水を如何に御し、高粱や粟、黍などの主要穀物の生産量を上げるかが、当時の為政者たちの悩みの種だったであろう。塩の確保のこともあり、この付近は当時の文明が発達するには有利な場所であったと思われる。

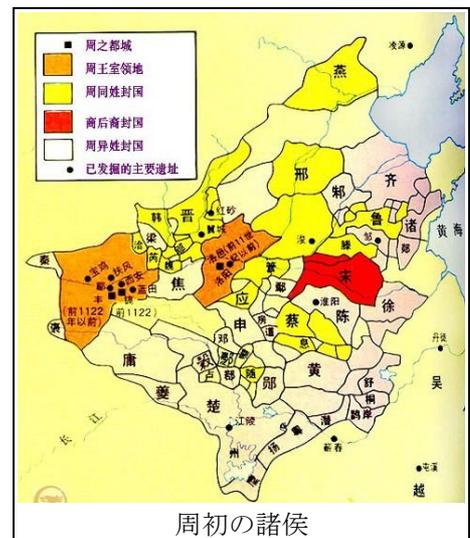
夏王朝の建国後、禹の息子の代には、夏族はより豊かな土地を求めて黄河を下ったようで、洛陽盆地の偃師市の二里头から、夏代と思われる王城遺跡がいくつも発掘されている。夏に続く商代には文化の中心は二里岡(鄭州市)や殷墟(安陽市)に移り、この地域はその後に発展した青銅器文化の中心から遠ざかった。

しかし、姫[Ji]姓の周王朝が西安市に成立すると、狩猟や遊牧で生計を立てる異民族に対する前線の役を担って、周の成王の弟の虞[Yú]が太原市に封じられ、その土地の名前を取って国名を唐と称した。後、河の名称の晋[Jin]に名を改めた。さらに、都は太原から300kmほど南方のこの地域にある臨汾市と運城市の中間の曲沃や絳・新絳に移転した。移転には異民族対策や穀物生産、周の都の鎬[Hào]京(西安市)や成周(洛陽市)に近いなどの理由が考えられる。

なお、晋は今でも山西省の一字名となって自動車のナンバープレートに書かれている。初代霸王の斉の桓公に続き春秋の世に覇を唱えたのは、19年の放浪時代の末に晋公になった重耳(文公)であった。文公の母も北方民族の白狄の出で、北方民族の武力は晋の後ろ楯になり、北方に勢力を伸ばしていた南方の大国楚を城濮[Pú](山東省鄆[Juàn]城県)に打ち破った(前632年)。

この地域で黄河を挟む平陸と三門峽には、これも姫姓の虢[Guó]があった。虢は東西南北の四つがあった。周の文王の弟たちが西周の都鎬京の東西を守備する形で、西虢(西安市の西、宝鶏市の東部)と東虢(鄭州市の西北、滎陽市)に封じられた。

東虢は春秋時代になってすぐの前767年に鄭に滅ぼされ、西虢は周の東遷と共に三門峽に移り、



南北の號となったが、黄河を隔てていただけで実質同じ国であった。南北の號は晋に攻められ、春秋初期の前655年になくなってしまった。

春秋時代楚と張り合った晋は、やがて晋の六卿の内の趙・魏[Wèi]・韓の三つに分裂し(前403年)、これ以降戦国時代となる。この地域は魏の版図に入り、都は禹王が即位したとされる安邑[yì](運城市夏県)に置かれていたが、西方の強国秦からの圧力が強く、遠く大梁(開封市)に都を移した。

秦漢代には北方異民族との接点は遠く北方の大同に移り、この地域は政治や文化の中心ではなくなった。ただ匈奴対策として、この地域を根拠地に多くの軍勢が北に向かった。

☆ 三国から西晋まで

三国時代に劉備の武将となった関羽はこの地域(河東解[Xiè]良)の出身で、三国演義の影響もあって後の世に有名な場所となった。今回も運城に建造された関帝廟の総本山ともいべき解州関帝廟を訪れる予定である。

三国末期に曹家のめぼしい人物を一掃して魏の全権を握った司馬昭は、蜀(漢)を滅ぼし、位は晋公、次で晋王に叙せられた。昭の子司馬炎(武帝)は265年末に魏帝曹奂に帝位の禅譲を迫って、国号を(西)晋とした。しかし、都は春秋時代の晋の故地ではなく、洛陽に置いた。農業生産力や交通・軍事の面から見ても、この地域やさらに北方に都を置くのは無理であった。

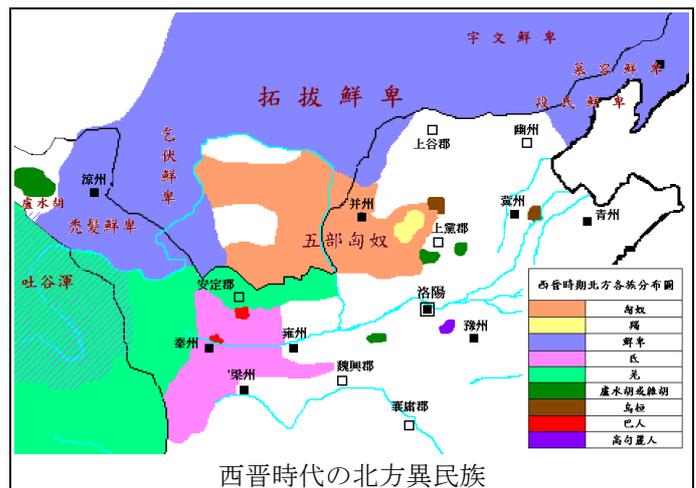
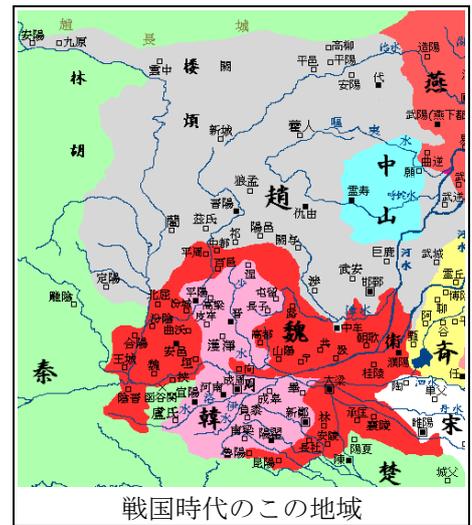
晋の武帝はその後、三国の残党であった南方の呉を280年に滅ぼし、全国を統一した。その後政治に倦み、武帝の死後宮廷は大いに乱れ、301年には八王の乱が始まった。

☆ 前趙から隋まで

晋の政治が乱れるのを見て、三国時代から魏や晋に傭兵を供給してきた、山西省北部に勢力を張る匈奴[Xiōngnú]の大首長劉淵は、晋から自立して匈奴大単于を名乗り、308年には国号を漢(後に趙)とし、都をこの地域の蒲子(臨汾市隰[Xí]県)に置き、黄河を下って洛陽を狙う機会を窺った。

この時から隋に統一されるまで、中国北方は五胡十六国、南方は呉から始まる六朝時代の続きとなる。五胡とは漢(華夏)族以外の五つの異民族で、匈奴・羯[Jié]・氐[Dī]・羌[Qiāng]・鮮卑[Xiānbēi]の各族である。

匈奴は今の内蒙古やモンゴルを中心にいた騎馬遊牧民である。北狄[Dí]と呼ばれていた周代から



常に中原に絡んでいて、(前)趙以外にも十六国の(大)夏や(北)涼を黄河西岸のオルドスの地に建国した。彼等は龍門口などで黄河を渡って、この地域にしばしば侵入した。

羯族も元々この地域の東隣に住む匈奴の一支族の牧畜民であり、319年前趙から別れて華北平原に後趙を建国した。

氐族はチベット系と言われ、351年に西方で(前)秦を建国し、一時は北朝を統一した。羌族も西方に住むチベット系で、384年に(後)秦を建国し、長安に都を置きオルドスの地を勢力下に収めた。鮮卑族の(北)魏とは黄河を東西に挟んでしばしば交戦し、この地域を支配下に置いたり、オルドスの地の一部を占領されたりしていた。

鮮卑族は、匈奴の主勢力が西方に収束した後に残った北方騎馬遊牧民族である。鮮卑拓跋部が代国(内蒙古自治区)を作っていたが、一旦消滅し再度建国後勢力を伸ばし、ついに山西省北端の平城(大同市)に都を置いて国号を(北)魏とした。

北魏はこの地域を南下し北朝を統一して、洛陽に都を移した。中国の北方が北魏に統一された439年から南北朝時代を迎える。北魏は皇帝と大丞相の確執で、534年に鄴[Yè]に都を置く東魏と長安に都を置く西魏に分裂し、東西魏の皇帝は傀儡になった。

のち、両国の真の権力者であった高歡や宇文泰の子孫に乗っ取られ、東魏は漢族の(北)齊に、西魏は鮮卑族の(北)周になった。この地域は黄河を隔てて北周の版図に入った。577年に政治が乱れていた北齊が滅ぼされた。

北周と北齊の争いの時は、多くの軍馬がこの地域を駆け抜けたが、その後、この地域が表舞台に上がって脚光を浴びることは少なくなった。

北周の外戚の随国公楊堅が禅譲を受け隋を建国した(581年)。南朝は589年に隋に陳が滅ぼされて、280年近く(三国からだとも400年)の戦乱の時代は終わり、鮮卑族系の武川鎮軍閥による全国統一がなり、唐代もかれらが政治の実権を握った。

なお、武川鎮軍閥は北魏時代に都平城を守るために置かれた北方民族の六鎮の内の一つである。この時代に、中国語の発音や文法の一部が漢代の上古漢語から大きく変り、中古漢語になった。日本の漢字音の漢音は、中古漢語の発音を指している。一方、呉音は南朝時代の発音を指している。

また、「隋」は楊堅によって国名として作られた字である、という説が有力である。



三 観 光 地

今回の旅行では、下流のゆったりと流れる様相とは異なる、ダム、滝、溪谷などの黄河の自然とそばにある塩湖や急峻な山を体験したいと思っている。以下日程順とズレるところもあるが、訪れる予定の場所について紹介する。

★ 壺口瀑布（臨汾市吉県，延安市宜川県）

この旅行の最大の見所は、黄河の心臓と言われる壺口瀑布[pùbù]である。臨汾市から黄河を渡って陝西省へ向かうG22(青蘭高速)は火焰山を数多の隧道で潜り抜けて壺口に至る。

この瀑布は急峻な山に見られる一条の滝というよりも、何段にもなった急流という感じである。川幅は約50m、落差は30mである。

滝の規模としては貴州省の黄果樹瀑布に次ぐ中国第二の滝であるが、黄色の滝としてはおそらく世界一だろう。壺口瀑布は、約1,600年前の五胡十六国時代には、この下流約3kmの孟門山にあったと伝えられ、毎年後退している。

滝は山西省側からだけでなく、道路事情が許せば右岸の陝西省側からも見る予定である。なお、山西省側からは、龍洞に降りて滝をすぐそばで見学可能である。

なお、TVで放映された中国大紀行の第1巻DVD『黄河に悠久の歴史を辿る』に、壺口の映像がある。Net上でも見ることができる。<https://www.youtube.com/watch?v=DXDMVJk7rxQ>

★ 龍門(禹門)口（運城市河津市，渭南市韓城市）

黄河は、100m程度の川幅で全長725kmの陝晋峡谷を抜け、龍門口で平野に出て川幅は一挙にkm単位に広がる。鯉がここから上流に遡ることが出来れば、龍になれるということから龍門口と称し、また禹王が山を切拓いて平野に氾濫する黄河の治水をしたということから禹門口とも呼ぶ。登龍門という言葉は『後漢書』に見えるが、この龍門はこの場所を指す。

黄河の鉄橋を渡って陝西省側からの眺めがよい。

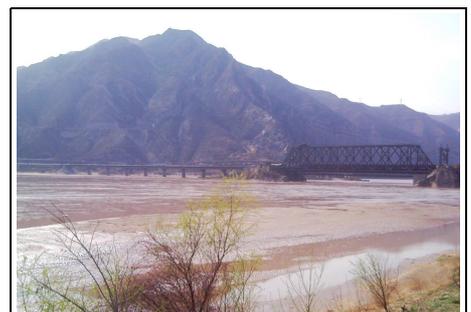
ここから南方の黄河のL字型の内側は概ね穀物栽培に適した平野で、禹王は治水に成功し夏王となり、安邑(運城市夏県)に都を置いた。ここでは黄河の流れは急ではなくなるので、



壺口瀑布



龍洞（見学には要雨具？）



龍門口の下流側



龍門口の衛星写真

古来ここで黄河を渡って多くの人々や軍勢がオルドスの地との間を東西に移動した。

☆ 禹王廟（運城市河津市）

禹王に関する記念物は中国全土の至る所にある。この地域は禹王の伝説がもっとも残っているため、あちこちに遺跡があるが、龍門口にある大禹王廟が最大規模であった。この場所は陝西省と山西省の往来の要であったため、軍事行動によって何度も破壊され、政治情勢が安定すると再建された。

北方異民族の匈奴のみならず、秦の符堅・唐の李世民・元のフビライ・明末の李自成・清の捻軍などは、皆ここを通過して河東（この地域の山西省側）、長安、北京などへ戦火を拡げた。河津を占領した日本軍も、1938年に当時の中国中央軍が駐屯守備していた禹王廟を攻撃して破壊した。

解放後、黄河の河川労働者など家がない人々の住処になっていた禹王廟の残骸を壊し、その場所に鉄道橋や道路橋がかけられ、黄河の護岸を修理したので、108号国道が龍門口で黄河を渡るところに龍門大禹廟跡を残すのみになり、古来の廟の姿はすでにない。しかし、山西省側の龍門村では、2012年から禹王廟の再建工事が進められていて、公開していたら見ることができる。

なお、禹王は日本でも治水の神様として国内60箇所ほどに禹王の旧跡がある。2013年7月には石碑がある高松で“第3回禹王サミット”が開催された。

★ 解池（運城市塩湖区）

中国の死海と呼ばれる解[Xiè]池は、古来周辺の山からこの低地へ流れこんでいた河が、黄河に流れ出すことを遮られて出来たアラビア半島の死海とまったく同じ構造の塩湖である。

中国も西域にはあまたの塩湖はあるが、中原の地にあるのはここだけであり、山西省最大の湖で、東西長約30km、南北幅3～5km、海拔324.5m、最深部6mである。

塩湖の塩は硫酸ナトリウムを含み、現在では汚染により食用塩の生産は行われていない。

宿泊予定の運城市中心部からは、塩湖の中央にある「中国死海—運城塩湖瑞莱斯養生城」というリゾート施設まで6km程度である。バス便もあり、施設内では死海のように塩湖に浮んだり、湖底の黒い泥を塗る美容もできるそうである。入館料は高いが、冬期はドーム内でも塩湖の浮遊体験ができる。

ここの塩は、黄海や渤海の塩田、西域の岩塩地帯、四川省の塩井などの塩の産地から遠く離れている中原の国家にとっ



て、新石器時代以前から生活上重要な意味を持っていたと思われる。

(西)漢の武帝は塩のほかに鉄や酒も専売にして、匈奴への外征費用に充てた。当時解池や塩井の塩は、国家財政収入の1/8を占めたと言われている。武帝の死後、法家思想に基づく桑弘羊ら高官と儒家達との間で専売の是非が議論され、『塩鉄論』にその時の議論の内容が記されている。

国共内戦時代に山西省を掌握していた山西軍閥の閻錫山も、ここの塩が大きな財源となった。

★ 池神廟，河東塩業博物館（運城市塩湖区）

ホテルから解池に行く間に、池神廟と河東塩業博物館が並んでいて、時間が許せば、塩湖の由来や歴史を知るために立ち寄る予定である。

★ 解州関帝廟（運城市塩湖区常平村）

三国演義の英雄関羽(字は雲長)は、この解池のすぐ南側の常平村の生れで、塩商人だったということである。この生れ故郷には関王故里という廟があるが、時間があれば前を通るかもしれない。



世界に散らばる関帝廟の総本家は、解池の西端の解州鎮にあり、塩湖の硝池がそばにある。

★ 鶴鵲楼（運城市永濟市）

鶴鵲[Guànquè]楼は、中国四大名楼の内、唯一北方の黄河流域に建っている。他の三つの楼、湖北省武漢市の黄鶴楼、湖南省岳陽市の岳陽樓、江西省南昌市の勝王閣はすべて江南にある。鶴鵲楼は元は黄河沿いにあったと言われるが、黄河の河道が変わったため、今は数100m離れている。

鶴鵲はカンジャクと読み、鶴はコウノトリ、鵲はカササギである。この楼は557年北周時代に建造され、幾多の戦火で消滅したが、2002年に黄鶴楼と同じく鉄筋コンクリートで再建された。

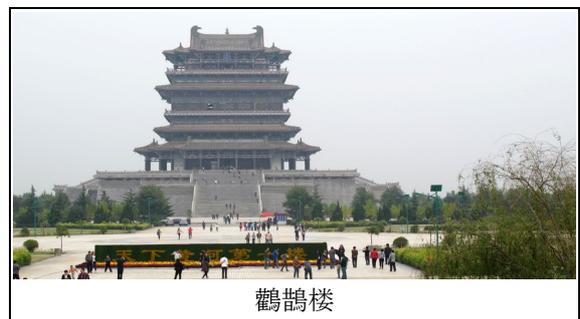
多くの名楼は漢詩と共にその名が伝えられている。黄鶴楼が李白の七言絶句：

故人西辞黄鶴楼 烟花三月下揚州，
孤帆遠影碧空盡 唯見長江天際流。

で有名なように、鶴鵲楼は盛唐の王之渙の五言絶句：

白日依山盡 黄河入海流，
欲窮千里目 更上一層樓。

で有名である。特に後ろの二句が学問に励みなさいと



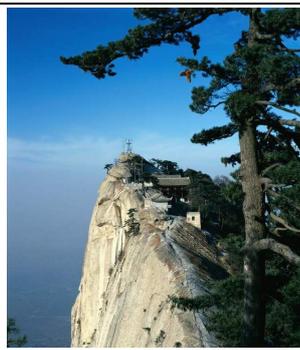
いう意味に捉えられて、中国の学校や書齋などに掲げられているのをよく見かける。

★ 華山（渭南市華陰市）

道教では五岳(東岳泰山・南岳衡山・西岳華[Huà]山・北岳恒山・中岳嵩[Sōng]山)を聖地として祭っている。衡山が湖南省にある外は、名楼とは逆にすべて黄河沿いかそれよりも北側にある。この



西峰ロープウェー



西峰山頂



南峰の长空栈道

五岳の中で一番高く険しいのが、華山であり、ほぼ垂直に切り立った数100mの岩壁に穴を開けて栈道を設営し、道士達は山頂に建てた廟へと登った。栈道の技術は四川省と陝西省を結ぶ戦国時代に造られた蜀の栈道でも大いに発揮されている。

華山は2013年に西峰(2,082m)に出来たロープウェイに乗れば、標高差894m(移動距離4,211m)を20分で一気に山頂近くまで登れる。何と山頂にはホテルもある。

最高峰である南峰(2154.9m)の東側にある长空栈道へは、石段の山道を歩かなくては行けないので、高所恐怖症の方や年配者には無理である。毎年山廻りの途中の山道で転落死する人がいる。

今回の旅では栈道へは行かずに、西峰の頂上(蓮花峰)から周りの景色を眺め、再度ロープウェイで元の乗り場に降りる予定である。なお、山頂廻りの全コースは健脚の人で約4時間かかるそうである。

ちなみに、中国の武侠小说の世界では、江湖の侠客が華山で修行したり、拠点を構えたりする場面が多くある。武侠小说の大家金庸が揮毫した「華山論劍」という石碑も建っている。



華山論劍

華山登山の前夜は、2007年に開設された、華山山麓の泉温105℃の温泉リゾート内にある華山御温泉酒店に宿泊予定である。客室内には唐式(日本式?)の低いベッドと座椅子が置かれている。なお、温泉はホテルと別料金で水着着用である。



御温泉酒店の唐式客間

中国の室内が現在の倚座になったのは、唐代末期から五代十国にかけてであり、盛唐のころまではまだ古代からの伝統の敷物をしいての平座であった。なおこのリゾートには軍関係の企業も出資していて、実際の武器で遊ぶこともできる。

秦嶺山脈の北側には、白楽天の『長恨歌』の一節「春寒賜浴華清池，温泉水滑洗凝脂。」からも分かるように、驪[Lí]山や太白山など天然温泉が湧く場所が多くある。

★ 函谷関 (三門峽市靈宝市)

日本では箱根八里の歌で名高い函谷関は、黄河の南側を東から漢中へ抜けるところに、戦国時

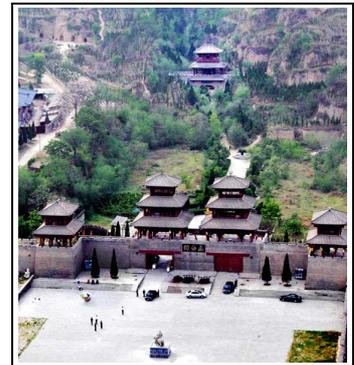
代に秦によって造られた(前361年)。西は高原，東は深い谷，南は秦嶺山脈，北は黄河という逃げ道がない場所である。

函谷関は，齊の孟嘗君が秦の昭襄王の討手から逃れた「鶏鳴狗盗」の故事や老子がここで『道德経』を著したことなどでも知られている。

秦代の函谷関(旧関)は項羽の楚軍によって破壊され，その後は再建されなかった。1992年に王塚[duō]村の元の場所近くに函谷関古文化旅游区ができ，そこで復元された函谷関を見学できる。

西漢時代には，都長安への攻撃に備えて洛陽へ抜ける手前の黄河の支流洛河の北岸(洛陽市新安県)に新しく函谷関が設けられた(前144年)。東漢になってからは，この関が都洛陽を守る役をした。

この新函谷関は解放後も残っていたが，1958年の大躍進政策のときに土法で鋼鉄を作る炉の煉瓦を取るために完全に壊され，碑文等も失われた。現在は基盤部分を発掘調査中である。



復元函谷関全景



新函谷関の残骸

★ 函谷古道 (三門峽市靈寶市)



一夫當關，萬夫莫克

函谷古道は，全景写真の奥の東門から細い谷間に沿って，往時唯一東西に抜けていた全長15kmの道であり，車馬の通行も困難だった。両側は切り立つ崖で谷の深さは50~70m，底は10m幅程度で一部は2，3mの所もある。古道の入り口から少しだけ覗き見る予定である。

★ 三門峽ダム (三門峽市)

三門峽ダムは黄河第一ダムとも呼ばれ，旧ソ連の技術援助で1958年に完成したコンクリート重力式ダムである。かつて国民党政府や日本軍も建設を検討したが，計画は放棄されていた。



三門峽ダムと砥柱山

主堰堤は，高さ106m，長さ713.2m，基部厚さ60mである。設計時は総貯水量354億 m^3 で110万kWの発電能力とされ，当時，米国のHooverダムに次ぐ世界第二位の規模であった。

しかし土砂の堆積速度が速

く，2年後には上流の西安まで洪水に見舞われる危険が生じたため，改修工事が行われ，1973年に最終的な排砂トンネルが完成し，現在の状態になった。このため，ダム容量は162億 m^3 と大きく減少し，発電能力も41万kWに低下した。

三門峽

この辺りは，黄河の河幅が300~400mに狭まり，急流となる。さらに河の中に鬼石と神石という二つの岩石があって，流れを三つに分けていた。

北側は舟が通ることができるので「人門」，中央は無事に通れるかどうか分からないので「神門」，南側は危険で通れないので「鬼門」と呼ばれ，合せて三門峽と言う名になった。

神・鬼の二石はダムの堰堤の基礎になった。ダムの下流すぐには，今も砥柱山という岩が流れに抗して立っている。

★ 黄河丹峡（三門峡市繩池県）

黄河南岸にある丹峡は、天然の地質学見本である。背後の黛眉山から黄河に流れ込む溪流が作る V 字型の谷間は、幅 20～30m、高さ 200～600m である。壁面は赤褐色の石英砂岩が成層し、12 億年前に大洋底で堆積した模様が見て取れる。

四季それぞれの景色はすばらしく、中国有数の溪谷美を誇っているという。今でも大型バスが入れないくらい交通が不便であったため、2012 年によりやく黄河丹峡景区として観光開発されたばかりの場所である。

黄河丹峡は、三門峡市の中心から G30 で東へ 70km で繩池県に着き、さらに高速出口から県の北方約 30km にある。往復移動に約 4 時間、現地の見学は 1 時間強しか取れないが、一見の価値があると思われる。付近には仰韶文化という名称が付いた謂れの地、仰韶村があり、そこにも仰韶大溪谷がある。

☆ 虢国博物館（三門峡市）

今回の旅行目的からは外れるので、見学予定には入っていないが、三門峡市最大の見ものの一つに虢[Guó]国博物館がある。博物館には墓より発掘した大量の車馬を初めとした、西周から春秋前期までの文物が展示されている。

もし、他の主要な見学予定地に問題が生じて行かれない場合、代替案としてここを訪れたいと考えている。



赤褐色の丹峡

以上

日中学院校友会旅行委員

文責 猪飼國夫